

Asian Party

アジアンパーティは、「アジアと創る」をコンセプトに、
 アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場をイメージし、今年で11回目を迎えました。
 令和5年度は、The Creatorsや福岡アジア文化賞のほか、
 福岡ミュージックマンスやアーティスト・イン・レジデンスなど、
 民間企業・団体等と連携した様々なイベントを全21事業実施しました。



The Creators



福岡ミュージックマンス - 中洲ジャズ



第19回アーティスト・イン・レジデンス
 清水美帆「たこたこ」制作風景(撮影:川崎一徳)



第19回アーティスト・イン・レジデンスの成果展 ダイアログ——交信する身体
 ジン・チェ&トーマス・シャイン [チェ+シャイン・アーキテクト]
 《Power of One 明鏡止水》2023年(撮影:川崎一徳)

発行／福岡アジア文化賞委員会事務局

〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内
 TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130

E-mail f.prize@io.ocn.ne.jp <https://fukuoka-prize.org/>

福岡アジア文化賞 報告書



第33回



Thongchai
WINICHAKUL

大賞
 トンチャイ・
 ウィニッチャクン
 Thongchai WINICHAKUL
 (歴史学者)

©Anuchit Nimitlung / WAY (Thailand)

Khatharya UM

学術研究賞
 カターリヤ・ウム
 Khatharya UM
 (政治学者・東南アジア研究者)

ZHANG Lu

芸術・文化賞
 チャン・リュル
 張律
 ZHANG Lu
 (映画監督)

主催 福岡市、
 (公財)福岡よかトピア国際交流財団
 後援 外務省、文化庁

■ = 創設特別賞 ■ = 大賞 ■ = 学術研究賞 ■ = 芸術・文化賞

- パキスタン**
- 第7回 **ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン** (カフワリー歌手)
 - 第17回 **アクシムフティ** (民俗文化保存専門家)
 - 第27回 **ヤスミン・ラリ** (建築家・建築史家・人道支援活動家)

- ネパール**
- 第15回 **ラーム・ダヤル・ラケシュ** (民俗文化研究者)

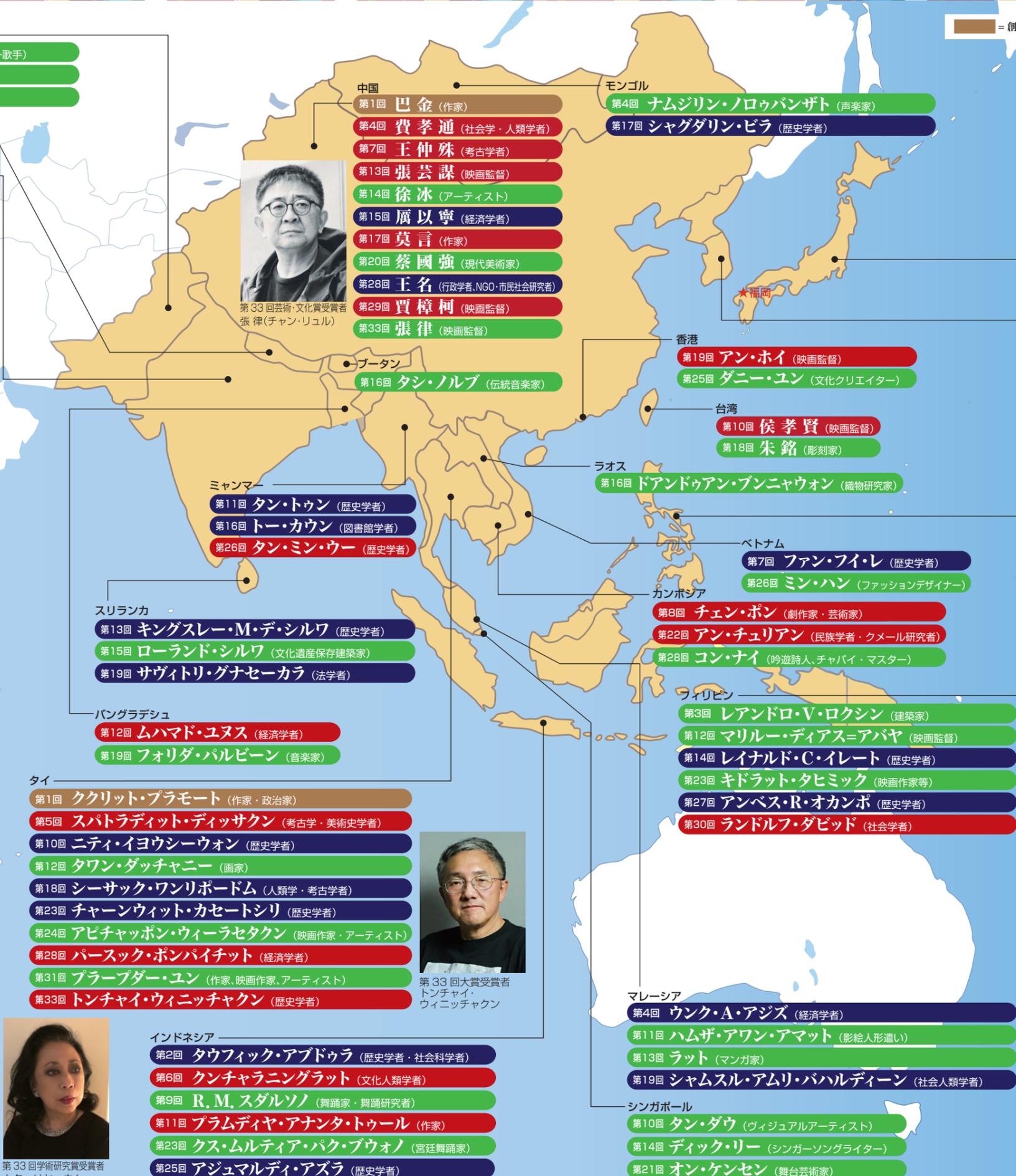
- インド**
- 第2回 **ラヴィ・シャンカール** (音楽家・シタール奏者)
 - 第5回 **パドマー・スプラマニヤム** (舞踊家)
 - 第8回 **ロミラ・ターバル** (歴史学者)
 - 第15回 **アムジャッド・アリ・カーン** (サロッド奏者)
 - 第18回 **アシシュ・ナンディ** (社会・文明評論家)
 - 第20回 **パルタ・チャタジー** (政治学・歴史学者)
 - 第23回 **ヴァンダナ・シヴァ** (環境哲学者)
 - 第24回 **ナリニ・マラニ** (アーティスト)
 - 第26回 **ラーマチャンドラ・グハ** (歴史学者・社会学者)
 - 第27回 **A.R.ラフマーン** (作曲家・作詞家・歌手)
 - 第29回 **ティージャン・バーイー** (ハンタワニー奏者)
 - 第31回 **パラグミ・サイナート** (ジャーナリスト)

- アジア以外の国・地域**
- 英国**
- 第1回 **ジョゼフ・ニーダム** (中国科学史研究者)
 - 第28回 **クリス・ペーカー** (歴史学者)
 - 第32回 **タイモン・スクリーチ** (美術史家)

- アイルランド**
- 第11回 **ベネディクト・アンダーソン** (政治学者)
- オーストラリア**
- 第5回 **王廣武** (歴史学者)
 - 第13回 **アンソニー・リード** (歴史学者)
 - 第24回 **テッサ・モーリス＝スズキ** (アジア地域研究者)

- フランス**
- 第20回 **オギュスタン・ベルク** (文化地理学者)
- ドイツ**
- 第22回 **ニールズ・グッチョウ** (建築史家・修復建築家)
- オランダ**
- 第30回 **レオナルド・ブリュッセイ** (歴史学者[東南アジア史専門家])

- 米国**
- 第2回 **ドナルド・キーン** (日本文学・文化研究者)
 - 第3回 **クリフォード・ギアツ** (文化人類学者)
 - 第6回 **ナム・ジュン・パイク** (ビデオ・アーティスト)
 - 第9回 **スタンレー・J・タンバイア** (人類学者)
 - 第21回 **ジェームズ・C・スコット** (政治学者・人類学者)
 - 第25回 **エズラ・F・ヴォーゲル** (社会学者)
 - 第32回 **シャジア・シカンダー** (アーティスト)
 - 第33回 **カタリーヤ・ウム** (政治学者・東南アジア研究者)



- 日本**
- 第1回 **黒澤明** (映画監督)
 - 第1回 **矢野暢** (社会学者)
 - 第2回 **中根千枝** (社会人類学者)
 - 第3回 **竹内實** (中国研究者)
 - 第4回 **川喜田二郎** (民族地理学者)
 - 第5回 **石井米雄** (東南アジア研究者)
 - 第6回 **辛島昇** (歴史学者)
 - 第7回 **衛藤 濤吉** (国際関係研究者)
 - 第8回 **樋口隆康** (考古学者)
 - 第9回 **上田正昭** (歴史学者)
 - 第10回 **大林太良** (民族学者)
 - 第12回 **速水 佑次郎** (経済学者)
 - 第14回 **外間 守善** (沖縄学者)
 - 第17回 **濱下 武志** (歴史学者)
 - 第20回 **三木 稔** (作曲家)
 - 第21回 **毛里 和子** (現代中国研究者)
 - 第24回 **中村 哲** (医師)
 - 第29回 **末廣 昭** (経済学者・地域研究者[タイ])
 - 第30回 **佐藤 信** (劇作家・演出家)
 - 第31回 **岸本 美緒** (歴史学者)
 - 第32回 **林 英哲** (太鼓奏者)

- 韓国**
- 第3回 **金元龍** (考古学者)
 - 第6回 **韓基彦** (教育学者)
 - 第8回 **林権澤** (映画監督)
 - 第9回 **李基文** (言語学者)
 - 第16回 **任東権** (民俗学者)
 - 第18回 **金徳洙** (伝統芸能家)
 - 第21回 **黄秉翼** (音楽家)
 - 第22回 **趙東一** (文学者)

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 1-2

福岡アジア文化賞とは 3-4

第33回受賞者

- 大賞 トンチャイ・ウィニッチャクン 5
- 学術研究賞 カタリーヤ・ウム 6
- 芸術・文化賞 張律(チャン・リュル) 7

授賞式 8~12

市民フォーラム

- トンチャイ・ウィニッチャクン 13
- カタリーヤ・ウム 14
- 張律(チャン・リュル) 15

第33回 芸術・文化賞連携企画 16

受賞者による学校訪問 17-18

歴代受賞者学術交流事業 19

歴代受賞者名鑑 20~26

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福岡アジア文化賞を

創設しました。以来、アジアのほぼ全域にわたり、多くの素晴らしい受賞者の功績を顕彰しています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからも都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1.目的 アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2.賞の内容

大賞

賞金 ¥5,000,000

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体を対象としています。

学術研究賞

賞金 ¥3,000,000

人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

芸術・文化賞

賞金 ¥3,000,000

アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体を対象としています。

3.対象圏域 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4.主催 福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団*



*福岡よかトピア国際交流財団: アジア太平洋博覧会「福岡'89」の成功を記念するとともに、アジアに開かれた福岡の歴史、文化、その他の特性を生かした国際交流を促進する活動を行うことにより、市民一人ひとりが多様性を認め合いながら国際的な相互理解を深める多文化共生社会の実現に寄与し、地域の発展と国際平和に貢献することを目的としています。

福岡アジア文化賞委員会委員

2023年9月30日現在 委員は五十音順、敬称略

特別顧問	金井 正彰	外務省国際文化交流審議官	久保田 勇夫	株式会社西日本フィナンシャルホールディングス代表取締役会長
〃	都倉 俊一	文化庁長官	倉富 純男	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	服部 誠太郎	福岡県知事	小松 浩子	日本赤十字九州国際看護大学学長
名誉会長	高島 宗一郎	福岡市長	朔 啓二郎	福岡大学学長
会長	谷川 浩道	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長	酒見 俊夫	西部ガスホールディングス株式会社代表取締役会長
副会長	石橋 達朗	九州大学総長	佐藤 靖典	特定非営利活動法人福岡市レクリエーション協会顧問
〃	打越 基安	福岡市議会議長	柴田 建哉	株式会社西日本新聞社代表取締役社長
〃	中村 英一	福岡市副市長	柴戸 隆成	株式会社福岡銀行取締役会長
監事	小川 明子	福岡市会計管理者	早田 敦	九州電力株式会社代表取締役副社長執行役員
〃	藤田 英隆	福岡市社会福祉協議会常務理事	竹添 賢一	日本放送協会福岡放送局長
委員	青柳 俊彦	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長執行役員	苗村 公嗣	九州経済産業局長
〃	石橋 正信	福岡市教育委員会教育長	藤井 一郎	株式会社九電工取締役会長
〃	今井 尚生	西南学院大学学長	松野 隆	福岡市議会議長
〃	今川 京子	日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表	丸石 伸一	朝日新聞社西部本社代表
〃	今林 ひであき	福岡市議会総務財政委員会委員長	安永 幸一	福岡文化連盟副理事長
〃	大曲 昭恵	福岡県副知事	山本 修司	毎日新聞社執行役員西部本社代表
〃	北島 己佐吉	九州産業大学学長	吉永 隆博	九州運輸局長
〃	国松 徹	読売新聞西部本社代表取締役社長		

第33回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会

委員長 / 石橋 達朗

九州大学総長
福岡アジア文化賞委員会副会長

副委員長 / 中村 英一

福岡市副市長
福岡アジア文化賞委員会副会長

委員 / 石坂 健治

日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー
芸術・文化賞選考委員会委員長

委員 / 内野 儀

学習院女子大学日本文化学科教授
東京大学名誉教授
芸術・文化賞選考委員会副委員長

委員 / 河野 俊行

九州大学名誉教授・特任研究員
学術研究賞選考委員会副委員長

委員 / 竹中 千春

立教大学法学部元教授
学術研究賞選考委員会委員長

委員 / 柄 博子

国際交流基金理事

委員 / 土屋 直知

株式会社正興電機製作所代表取締役会長

福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞

委員長 / 竹中 千春

立教大学法学部元教授

副委員長 / 河野 俊行

九州大学名誉教授・特任研究員

委員 / 木宮 正史

東京大学大学院総合文化研究科教授

委員 / 清水 一史

九州大学大学院経済学研究院教授

委員 / 清水 展

京都大学名誉教授
関西大学政策創造学部・ガバナンス研究科客員教授

委員 / 高原 明生

東京大学大学院法学政治学研究所教授

委員 / 田村 慶子

北九州市立大学名誉教授・特別研究員
NPO法人国境地域研究センター理事長

委員 / 脇村 孝平

大阪経済法科大学経済学部教授

福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞

委員長 / 石坂 健治

日本映画大学教授
東京国際映画祭シニア・プログラマー

副委員長 / 内野 儀

学習院女子大学日本文化学科教授
東京大学名誉教授

委員 / 宇戸 清治

東京外国語大学名誉教授

委員 / 小川 忠

跡見学園女子大学文学部教授

委員 / 片岡 真実

森美術館館長
国立アートリサーチセンター センター長

委員 / 寺内 直子

神戸大学大学院国際文化学研究所教授

委員 / 西村 幸夫

國學院大学観光まちづくり学部長

委員 / 松隈 浩之

九州大学大学院芸術工学研究院准教授

2023年9月30日現在 委員は五十音順、敬称略



©Anuchit Nimitlung / WAY (Thailand)

トンチャイ・ウニッチャクン

タイ／歴史学者

主な経歴

1957	タイ、バンコク生まれ
1981	タマサート大学修士号(歴史学)
1984	シドニー大学修士号(歴史学)
1988	シドニー大学博士号(歴史学)
1988-91	タマサート大学講師
1991-95	ウィスコンシン大学マディソン校歴史学部助教
1995-2001	ウィスコンシン大学マディソン校歴史学部准教授
2001-16	ウィスコンシン大学マディソン校歴史学部教授
2003-	米国芸術科学アカデミー会員選出
2008-10	ウィスコンシン大学マディソン校歴史学科長
2012-16	米国アジア研究協会理事(13-14年は会長)
2015	京都大学東南アジア研究所招へい研究員
2016-	ウィスコンシン大学マディソン校名誉教授
2019-	日本貿易振興機構アジア経済研究所名誉研究員
2022-	タマサート大学プリディー・パナムコン国際学部客員教授

主な受賞歴

- 1995 ハリー・J・ベンダ賞 (*Siam Mapped: A History of the Geo-Body of a Nation*)
- 2004 第16回アジア・太平洋賞大賞 (『地図がつくったタイ: 国民国家誕生の歴史』)
- 2022 欧州東南アジア人文学賞 (*Moments of Silence*)
- 2023 ジョージ・M・ケイヒン賞 (*Moments of Silence*)

主な著作

- 『地図がつくったタイ: 国民国家誕生の歴史』石井米雄訳, 明石書店, 2003.
- 『Democracy with the Monarchy Above Politics』(タイ語), Same Sky Books, 2013.
- 『6 October: Unforgettable but Unable to Remember』(タイ語), Same Sky Books, 2015.
- 『The Face of Royal-nationalism in Thai Historiography』(タイ語), Same Sky Books, 2016.
- 『Thais/ Others, Nonhaburi, TH: Siam』(タイ語), Same Sky Books, 2017.
- 『Breaking the Conventional Thai History』(タイ語), Same Sky Books, 2019.
- 『The Great Transformation of Siam: the intellectual foundations of modern Siam』(タイ語), Same Sky Books, 2019.
- 『The Prerogative State and the Royal Rule of Law: a history of the Rule by Law in Thailand』(タイ語), for the 17th Puey Ungphakorn Memorial Lecture, タマサート大学, 2020.
- 『The Royal Nation-State』(タイ語), Same Sky Books, 2020.
- 『Moments of Silence: The Unforgetting of the October 6, 1976, Massacre in Bangkok』, University of Hawaii Press, 2020.

贈賞理由

トンチャイ・ウニッチャクン氏は、地図というビジュアルな資料の作成と利用のされ方に着目し、近代的な国家と国民がいかに確かな実態として人々の心の中に入り込み、存在するようになったかについてアジア発の問題提起を行い、世界の人文・社会科学に大きな影響を与えた。国家と国民が創られたものであるゆえに両者の関係をより良く作りなおしてゆくことが可能であることを信じ、研究成果・知見を社会改革のために活用することを真摯に心がけてきた。また大学と社会をつなぎ、次の世代の若者と子どもたちのために、より良い社会を作ることに貢献してきた。

トンチャイ氏は1957年にタイのバンコクで生まれ育った。大学教育をバンコクで、大学院教育をオーストラリアで受けた。1988年から3年間タマサート大学で講師を勤めた後、1991年から米国ウィスコンシン大学マディソン校歴史学科の助教、1995年から准教授、2001-16年に教授を務めた。その間2003年にはアメリカ芸術科学アカデミー会員に選出された。2012-16年に米国アジア研究協会理事、2013-14年は会長を務めている。2015年は京都大学東南アジア研究所およびシンガポールのISEASユソフ・イシャク研究所に客員研究員として滞在し、2017-19年は日本貿易振興機構のアジア経済研究所上席主任調査研究員として学術の国際交流に貢献した。

1975年のベトナム戦争終結後の混乱が続くタイで、トンチャイ氏はタマサート大学における学生運動を主導した。1976年10月5日の夕刻、氏は軍事独裁政権の復活の動きに反対して大学構内で集会を開いていた。そ

こを国境警備警察や右翼組織が襲い、50名近い学生が犠牲となった。「血の水曜日事件」と呼ばれるこの惨事の直後に軍がクーデターを起こし、氏は逮捕された。2年間の投獄の後に国王の恩赦によって釈放され、復学したのちシドニー大学大学院に留学した。

そこでの博士論文は『地図がつくったタイ: 国民国家誕生の歴史』(2003年)として出版された。国民や国家という自明の観念が、実は地図の制作と普及によって恣意的かつ人為的に創造されてきた歴史を、タイを事例として実証的に検証し、ベネディクト・アンダーソン(福岡アジア文化賞受賞者)をはじめ、東南アジアを越えてナショナリズム研究に大きな貢献をした。同書は2004年に第16回アジア太平洋賞大賞を受賞している。また Moments of Silence: The Unforgetting of the October 6, 1976, Massacre in Bangkok (和訳: 沈黙のとき) (2020年)では1976年の虐殺事件を自らの経験を振り返りながら考察することで新たな歴史学の方向性と可能性に挑んでいる。同書は2022年に欧州東南アジア人文学賞と2023年に米国アジア研究協会ジョージ・M・ケイヒン賞を受賞している。

また近年も、王政と民主主義、国民国家、法治の制度などの歴史と現状と今後についてタイ語で8冊の単著書を発表し、タイの学生や市民の政治意識や活動を支え導く存在となってきた。学術面における独創的で国際的な活躍とともに、民主主義と市民社会を発展させるためにコミットする姿勢はアジアに生きる知識人の範となるもので、トンチャイ・ウニッチャクン氏のその貢献はまさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。



カタリーヤ・ウム

米国／政治学者、東南アジア研究者

主な経歴

1960	カンボジア、プノンペン生まれ
1975	難民として米国へ移住
1983	カリフォルニア大学サンディエゴ校修士号(政治学)
1990	カリフォルニア大学バークレー校修士号(政治学)
1992-95	カリフォルニア大学バークレー校エスニック研究学部AAADS (アジア系米国人／アジア系ディアスポラ研究)プログラム講師
1995-2001	カリフォルニア大学バークレー校エスニック研究学部AAADS プログラム助教
2001-	カリフォルニア大学バークレー校エスニック研究学部AAADS プログラム准教授
2006-19	カリフォルニア大学バークレー校留学プログラムディレクター
2015	ソルボンヌ・ヌーヴェル大学客員教授、早稲田大学客員研究員
2016	批判的難民研究共同体共同設立者
2021-	カリフォルニア大学バークレー校社会科学院副院長

主な受賞歴

- 1999 マサチューセッツ大学ボストン校功労賞
- 2008 米国下院議員バーバラ・リー氏より特別賞
- 2010 米国下院議員アンナ・エシュア氏より特別賞
- 2011 東南アジア学生連合特別賞
- 2019 海外クメール人サミットより優秀サービス賞 およびコミュニティリーダーシップ賞
- 2019 カリフォルニア大学バークレー校より 組織の卓越性と公平性の推進を称える総長賞

主な著作

- 『A Dream Denied: Educational Experiences of Southeast Asian American Youth: Issues And Recommendations』, Southeast Asia, Resource Action Center, 2003.
- 『From the Land of Shadows: War, Revolution, and the Making of the Cambodian Diaspora』, ニューヨーク大学出版, 2015.
- 『Southeast Asian Migration: People on the Move in Search of Work, Marriage and Refuge』(共編), Sussex Academic Press, 2015.
- 『We all eat Rice』(共著), ユネスコ(国際連合教育科学文化機関), 2020.
- 『Secrets of Spice』(共著), ユネスコ(国際連合教育科学文化機関), 2020.
- 『Departures: An Introduction to Critical Refugee Studies』(共著), University of California Press, 2022.
- 『Globalization and Civil Society in East Asian Space』(共編), Routledge, 2022.
- 『Générations post-réfugiées: Les descendants de réfugiés d'Asie du Sud-est en France』(共編), Presses Universitaires François Rabelais, 2023.

贈賞理由

カタリーヤ・ウム氏は、政治学と東南アジア研究に携わり、現代世界の課題に挑む秀逸な研究者であり、次世代の育成に力を注ぐ優れた教育者でもある。祖国カンボジアの悲劇の歴史を掘り起こし、移民や難民の人々の苦境に光を当て、武力紛争と平和構築、移民国家米国のエスニシティやアイデンティティの相克を捉える鋭い分析を行い、グローバル研究の新しい方法を提示してきた。

ウム氏は、1960年カンボジアのプノンペン生まれ。内戦下の故郷を後に、1975年外交官の父らと米国に移住。政治学を学び、カリフォルニア大学バークレー校大学院で東アジア研究の泰斗チャルマーズ・ジョンソン教授に師事し、1990年博士号を取得し、総長最優秀ポスドク・フェローにも選ばれた。1995年同校エスニック研究学部助教、2001年准教授に就任し、現在までアジア系米国人／アジア系ディアスポラ研究プログラムを率いてきた。さらに、全学の平和・紛争研究プログラム長などの要職も歴任し、2021年より社会科学院副院長を務める。

1970年代、ベトナム戦争に巻き込まれたカンボジアでは王政が倒され、混乱の中からポル・ポト政権が誕生し、未曾有のジェノサイドが引き起こされた。主著のFrom the Land of Shadows: War, Revolution, and the Making of the Cambodian Diaspora (和訳: 暗影の国から一戦争、革命、カンボジア人ディアスポラの創出) (2015年)では、「なぜこの悲劇が起こったか」という問いへの答えを探しながら、生き延びた人々の声を聴き、残酷な暴力に沈黙で抵抗する姿に学び、不条理な運命に分断された国民の物語を綴る。

だからこそ、ウム氏は平和で公正な世界の実現をめざし、仲間とともに国際的な共同研究に邁進する。Southeast Asian Migration (和訳: 東南アジアの移民) (2015年)、Departures (和訳: 旅立ち) (2022年)、Globalization and Civil Society in East Asian Space (和訳: 東アジア空間におけるグローバリゼーションと市民社会) (2022年)、Générations post-réfugiées (和訳: ポスト難民世代) (2023年)など、続々と共著を刊行してきた。

急激な変化に見舞われる時代には、未来を担う人々の育成が急務であり、ウム氏は大学キャンパスでも国籍・人種・エスニシティ・言語・ジェンダー・政治的信条などを互いに尊重し、学問の自由と発展を促す教育を目指してきた。その使命感を胸に、米国だけでなく、アジアや欧州の大学でも教鞭を執る。さらに、子どもたちにも希望を託し、ユネスコと協力して、国際協力を育む東南アジア共通史の書も出版してきた。研究とともに教育における功績に、2019年カリフォルニア大学バークレー校からの賞も与えられた。

自らの経験を踏まえ、カンボジアの内戦と大虐殺の歴史を掘り下げつつ、新たな研究領域を切り拓くウム氏の研究は、不確実性を増す現代世界において、その一層の重要性を獲得している。今日のいくつかの難題を乗り越えるために、協力して知を革新し、若者の啓蒙に尽力し、国境を越えた市民の絆を築こうとするカタリーヤ・ウム氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。



張 律 (チャン・リュル)
中国 / 映画監督

主な経歴

- 1962 中国、吉林省延辺朝鮮族自治州の延吉市生まれ
- 1986 延辺大学卒業(中国文学科)
- 1987 北京に拠点を移し、小説家として活躍
- 2001 『11歳』で初めて短編映画の監督を務める
- 2004 『唐詩』で初めて長編映画の監督を務める
- 2012-20 延世大学校コミュニケーション大学院映像学特任教授・延世大学校グローバル人材大学所属教授

主な受賞歴

- 2005 第58回カンヌ国際映画祭批評家週間ACID賞(『キムチを売る女』)
イタリア ベサロ国際映画祭グランプリ
第10回釜山国際映画祭ニューカレンツ賞
- 2006 南アフリカ ダーバン国際映画祭最優秀監督賞(『キムチを売る女』)
フランス ウズー国際映画祭グランプリ
ベルギー シネマ・ノヴォー映画祭グランプリ
- 2010 第60回ベルリン国際映画祭ジェネレーション部門14 Plus(『豆満江』)
第15回釜山国際映画祭NETPAC賞
- 2014 第15回釜山映画評論家協会賞大賞(『慶州(キョンジュ) ヒョンとユニ』、『風景』)
- 2015 フェロー 諸島映画祭2015 ゴールデン・ムーン賞(最優秀監督賞)(『フィルム時代の愛』)
- 2017 第18回釜山映画評論家協会賞審査委員特別賞(『春の夢』)
- 2019 第39回韓国映画評論家協会賞 韓国映画評論家協会10選(『群山: 鷺鳥を詠う』)
- 2021 第28回ヴズール国際アジア映画祭 最優秀賞(『柳川』)

主な作品

- | | |
|------------------------------------|------------------------------|
| 『11歳』2001.(監督) | 『フィルム時代の愛』2015.(監督) |
| 『唐詩』2004.(監督・脚本・制作協力) | 『春の夢』2016.(監督・脚本) |
| 『キムチを売る女』2005.(監督・脚本) | 『群山: 鷺鳥を詠う』2018.
(監督・脚本) |
| 『風と砂の女』2007.(監督・脚本) | 『福岡』2019.(監督・脚本) |
| 『重慶』2008.(監督・脚本) | 『柳川』2021.(監督・脚本) |
| 『イリ』2008.(監督・脚本) | 『白塔之光』(中国語題)2023.
(監督・脚本) |
| 『豆満江』2010.(監督・脚本) | |
| 『慶州(キョンジュ) ヒョンとユニ』
2014.(監督・脚本) | |
| 『風景』2013.(監督) | |

贈賞理由

張律氏は21世紀の東アジアを代表する映画監督である。中国の朝鮮族という出自と小説家としての幅広い教養をふまえて映画監督となり、アジア各国のスタッフ・キャストと協働しながら中国・韓国・日本の地方都市を舞台に据えて、国籍・国境を越えた「東アジア映画」としか呼びぶようのない独創的な作品を創り続けている。

張氏は1962年、中国の吉林省延辺で朝鮮族3世として生まれた。文化大革命期に父親が逮捕され、幼い氏は母親とともに農村に下放された。この時期に韓国語に加えて中国語も使えるようになったという。延辺大学中国文学科を卒業し、同大学で中国文学の教員となったのちに北京に拠点を移して小説家として活動する。

映画監督としては遅咲きで、2004年に長編第一作『唐詩』を発表。翌05年の『キムチを売る女』でカンヌ国際映画祭批評家週間ACID賞を受賞する。中国の辺境で生きる朝鮮族のシングルマザーを描く同作には、時事的な問題への関心と少数民族としての経験や知見が色濃く反映されている。2010年代に入ると韓国の著名な俳優やスタッフと組み、古都・慶州で男女の出会いと別れが展開する『慶州(キョンジュ) ヒョンとユニ』(2014年)、ソウルを舞台に脱北者ら3人の男性が中国から来た朝鮮族の女性に想いを寄せる『春の夢』(2016年)といった話題作を次々に発表し、カンヌ、ベルリン、釜山など主要映画祭に入選を果たしていく。

そして現在までのキャリアの集大成といえる三部作『群山: 鷺鳥を詠う』(2018年)、『福岡』(2019年)、『柳川』(2021年)を相次いで発表。これらは韓

国・中国に日本を加えた多国籍の映画人が協働して創り上げた全く新しい「東アジア映画」であると同時に、当初は映画祭への参加で訪れた福岡との交流が深まる中でアイデアが膨らみ、企画から撮影に至る過程で多くの市民・県民が関わって制作された点で、福岡にとっても国際文化交流の成果として意義深い三部作である。いずれも後悔や心残りを抱えた者がある町を訪れ、特有の風景が移ろい、緩やかな時間が流れるなか、土地に馴染みながら人生と再び向き合っていく姿を描いている。

張作品の大きな特徴は、朝鮮族や脱北者など社会的マイノリティーへの眼差しに加えて、現実と夢、現在と過去、生と死といった一見対立する二項を往還する巧みな語り口とあり、近年ますます自在さを増している。また東アジアの近現代史に係る事象がしばしば登場するとともに、唐代の漢詩、福岡で没した詩人・尹東柱(ユン・ドンジュ)の作品から日本の童謡まで様々な詩歌が挿入されて豊かな情緒を醸し出している。劇中の言語の扱いもユニークで、韓国語、中国語、日本語が飛び交いながら、異なる言語での会話が難なく通じ合う自由闊達な演出が施され、異文化の融和や共生のビジョンを感得することができる。

2023年には、北京を舞台にした最新作『白塔之光』(2023年)がベルリン国際映画祭コンペティションに入選し、一段とスケールアップした姿で張氏はポスト三部作の一步を踏み出した。

張律氏は、中国・韓国・日本の映画人との越境的なコラボレーションを通じて、その作品世界においても異文化の融和や共生のビジョンを表現し、比類なき「東アジア映画」と呼ぶべき作品を発表し、世界的に高く評価されている。その貢献は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。

第33回 福岡アジア文化賞



授賞式

日時: 2023年9月12日(火) 18:15~19:45 会場: 福岡国際会議場

式次第

第1部

受賞者紹介

主催者代表あいさつ

お言葉

選考経過報告

贈賞

福岡市長 高島 宗一郎

秋篠宮皇嗣殿下

九州大学総長 石橋 達朗

福岡市長 高島 宗一郎

(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長 谷川 浩道

第2部

祝賀パフォーマンス

受賞者功績紹介

受賞者スピーチ・インタビュー

秋元加代子タイ舞踊団



壮大な音楽と、ムービングライトの色鮮やかな演出と連動した映像で、華やかに幕を開けた福岡アジア文化賞授賞式。世界で活躍する受賞者を会場に招き、秋篠宮皇嗣妃両殿下のご臨席を仰ぎ、各界関係者、市民が一同に会して式はスタートしました。

式典では、初めに受賞者が紹介され、大賞のトンチャイ・ウィニッチャクン氏、学術研究賞のカターリヤ・ウム氏、芸術・文化賞の張律（チャン・リュル）氏がステージに登場。会場は温かい祝福の拍手に包まれました。

次に、主催者を代表して高島宗一郎福岡市長が挨拶。「持続可能で多様性のある社会の実現が求められているからこそ、アジア地域の多様な文化と価値を広く伝える福岡アジア文化賞の役割は、これまで以上に重要なものとなってくる」と述べました。続いて秋篠宮皇嗣殿下より、お祝いのお言葉を賜りました。

その後、審査委員長の石橋達朗九州大学総長より、今年度の選考経過報告が行われました。そして、高島市長と谷川浩道（公財）福岡よかトピア国際交流財団理事長より、賞状と記念のメダルが授与されました。さらに、花束が贈呈され、観客から盛大な拍手が送られました。

続いて、秋元加代子タイ舞踊団による祝賀パフォーマンスが披露され、平和と幸せをテーマにしたタイの民族舞踊で会場を魅了しました。

受賞者の輝かしい功績が映像で紹介された後、受賞者スピーチではそれぞれの受賞者から感謝と喜びの声が伝えられました。続くインタビューでは、研究や活動の歩み、大切にしてきた思い、これからの抱負などが語られました。

フィナーレでは会場から一段と盛大な拍手が送られ、第33回福岡アジア文化賞授賞式は幕を閉じました。



ムービングライトと映像によるオープニング



祝賀パフォーマンス



高島市長による主催者代表挨拶



石橋総長による選考経過報告



大賞のトンチャイ・ウィニッチャクン氏への贈賞



学術研究賞のカターリヤ・ウム氏への贈賞



芸術・文化賞の張律（チャン・リュル）氏への贈賞



谷川理事長によるメダル授与



受賞者の功績紹介映像

秋篠宮皇嗣殿下お言葉



本日、第33回福岡アジア文化賞授賞式が開催されるにあたり、大賞を受賞されるトンチャイ・ウィニッチャクン氏、学術研究賞を受賞されるカターリヤ・ウム氏、そして芸術・文化賞を受賞される張律（Zhāng Lǜ）氏に心からお祝いを申し上げます。



そして今日、皆様と共に出席し、受賞者それぞれの活動や研究の一端について、この会場でお話を伺うことができますことを誠に嬉しく思います。

「福岡アジア文化賞」は、古くからアジア各地で受け継がれている多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造、そしてアジアに関わる学術研究に寄与することを目的として、それらに功績のあった方々を顕彰するものです。そして創設以来、アジアの文化とその価値を世界に示していく上で、本賞が果たしてきた役割には誠に大きなものがあります。

私自身、東南アジアを中心に、いくつかの国々を訪れ、多様な風土や自然環境によって創り出され、長い期間にわたって育まれてきた各地固有の歴史や言語、民俗、芸術など、文化の豊かさと深さに関心をもちました。

そして、それらを記録・保存・継承するとともに、さらに発展させていくことの大切さと、アジアを深く理解するための学術の重要性を強く感じております。このことから、本賞がアジアの文化の価値とそれらについての学術的な側面を伝えていくことは、大変意義の深いことと考えます。

本日受賞される3名の方々の優れた業績とその意義が、アジアのみならず、広く世界に向けて発信され、また、これらが国際社会全体で共有されることによって、人類の貴重な財産になることと思います。

おわりに、受賞される皆様に改めてお祝いの意を表しますとともに、この「福岡アジア文化賞」を通じて、アジアの各地に対する理解、そして国際社会の平和と友好が一層促進されていくことを祈念し、授賞式に寄せる言葉といたします。

大賞

トンチャイ・ウニッチャクン



未来の礎となる新たな歴史をつくり
民主主義と正義を追求する

福岡アジア文化賞大賞を受賞し、とても光栄に思います。本賞の受賞は、私の二つの基本的な信念であるタイと東南アジアの研究への献身が認められたものだと思います。その信念の一つ目は、タイとその地域の歴史はより広い世界に関係があり、世界を豊かにするということです。二つ目は、歴史は強力な知識だということです。一方で、タイやその他の多くの国でのナショナリズムの歴史がそうであったように、歴史は其中で利用されることもありえます。しかしながら、今ある歴史とは別の新たな歴史は可能であると思っています。それは望ましい未来の基

礎となると信じています。

タイにおける民主主義や正義への献身を認めていただいたことにも感謝いたします。1976年のタマサート大学での虐殺事件で命を落とした友人たちが、日々私にこの現実を思い起こさせてくれます。この賞を彼らに捧げたいと思います。

残念ながら、物事を忘れ去られることは、あまりにも当たり前になっています。私は福岡アジア文化賞の受賞の知らせを受けた時、2004年にタイ南部の村で起こったマレー族イスラム教徒たちの虐殺被害者の話を語るイベントに参加していました。それゆえに、私の受賞への喜びは深く謙虚なものでした。

私にとって、知識を追求することと民主主義と正義への献身は、お互いに必要なものです。実際の生活で無関係に見える知識であっても、より良い未来へとつながる革新的な知識であるかもしれないのです。私は学問という象牙の塔と市井の両方の一員であることを誇りに思います。

福岡アジア文化賞は、私たち全員に対して、人類の未来のために小さなことであっても、もっとやっというインスピレーションを与えてくれるものです。



インタビュー

質問：研究を深めていく中で、地図に着目した経緯をお聞かせください。

トンチャイ氏：当初の目的は、なぜ人々が国家に執着するのか、君主制にこだわるのかを理解することでした。タイの歴史を違う視点で振り返り、新しい歴史をつくる必要があると考えました。政治的な思想にあまり頼ることなく、過去を見る方法を模索する中で、地図の研究がトリガーになると気づいたのです。国家は、本当に些細な紙切れに書いた地図によって始まったことを認識し、本にまとめました。

質問：日本で印象に残ったことがありましたら、お聞かせください。

トンチャイ氏：アジア経済研究所で働く機会がありましたが、理想的な研究環境でした。特に、日本の図書館間貸借システムは世界一だと思います。おかげで、研究の傍ら数冊の本を書き上げることができました。また、日本からは多く

のことを学びました。日本は西洋と交流しながら、高度な教育と学術研究に取り組んできました。自然科学、社会科学、人文科学を総合した独自の東南アジア研究は世界に類を見ません。

質問：これからの民主主義に期待することや、伝えたいことは何でしょうか。
トンチャイ氏：この10年の間に、東南アジアの民主主義は後退したように感じます。社会の複雑さが増すにつれ、その必要性は高まっています。すべての社会にとって、民主主義はなくてはならないものなのです。

学術研究賞

カターリヤ・ウム



難民としての経験と思いやりを胸に
平和で公正な世界を目指す

福岡アジア文化賞の受賞は、とても身に余る思いであり、深く感謝いたします。この受賞は、移民・難民研究の学者として私の学術的な貢献への認知だけでなく、私たちグローバル・コミュニティが直面している問題の重大性への認知でもあると思っています。こうしている間にも、1億800万人の人々が故郷を追われ、強制移住は、現代における喫緊の課題のひとつとなっています。私たちの未来、そして国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)を考えると、17の目標のうち14がなんらかの形で移住に関連していることがわかります。

インタビュー

質問：政治学を志した理由やきっかけをお聞かせください。

ウム氏：初めから政治学を専攻しようと思ったわけではありません。私は1975年に難民となりましたが、政治は私たち難民に、優しくありませんでした。大虐殺から生き延びた私には、「なぜ私たちの身にこのようなことが起きたのか」という疑問がずっとつきまといました。大学の学部生後期に、政治学を学ぶ機会があり、教科書で東南アジアの歴史について読んだとき、カンボジアの人々の存在が無視されているように感じました。長い間フランスの植民地であり、カンボジアに関する研究はカンボジア人以外の人々によって書かれてきました。私たちの歴史はどこに存在するのか。私たちは一体どういう存在なのか。その答えは見つかりませんでした。政治学は私に、何が失われ、どこでそれを探すべきかを教えてくれました。

福岡アジア文化賞によって、私のような難民は、単に食い止めるべき危機でも、避けるべき社会的負担でもなく、より良い社会、より公正で平和な世界を築くために貢献できる人々なのだという先見性のある力強いメッセージを、世界に発信することになります。難民たちは誰よりも平和の重要性を理解しています。戦争の惨禍の生きた証だからです。私たちは家を、国を、そして家族を失っただけではなく、世界を失いました。何も持たず、新しい家に入ることになるかもしれません。しかし、思いやりという恩恵を胸に携えています。暗く辛い時を過ごす中で、思いやりの欠如に対する悲しみや、思いやりの心が満ちていることに対する温かさを感じたことがある人たちだけがこの恩恵を持っているのです。

変革は、新しい可能性を思い描く力とともに始まると歴史は示しています。福岡アジア文化賞は、平和と相互理解のために尽力する多様な方々を表彰しています。私たちが後世に残したいと思う世界に向かって、考え、想像し、そして願わくば共に努力するためのプラットフォームとなっているのです。



芸術・文化賞

張律 (チャン・リュル)



アジアで共に生きる人々の感情を
映画を通して探求し続けたい

この度は、福岡アジア文化賞の芸術・文化賞をいただき、身に余る名誉をかみしめたと同時に、大きな責任を感じています。受賞は私の過去の仕事に対する評価の証であると思います。今後の創作活動に対するより一層の期待と励ましでもあります。このことを肝に銘じて、これからも努力を惜みず、精進して参ります。

私は映画監督です。ある意味、虚構の世界で仕事をしています。幸いなことに、虚構の世界は、刻々と変化する現実の社会と双方向に関わりあっているものです。そして、たくさんの人と力を合わせて成し遂げるものです。ゆえに、この度の受

賞は、私個人に与えられたものではなく、今日まで私と一緒に仕事をしてきたチームの皆さんに与えられたものと心から思います。

かつて、そして現在、私が仕事をしている中国、韓国、日本、モンゴルといった地理的空間は、即ちこの賞の名前になっている「アジア」に当たります。私は、アジアの人間です。当然、体の中におのずとアジア的「情懐(じょうそ)」が流れています。しかし、不思議なことに、体に染み込んでいるこの「情懐」こそ、時折自分ですらよく分からなくなり、遠い存在に感じることもあります。だからこそ、映画を撮る仕事をしているのだと思います。映画というのは、すでに明白なことを撮るものではなく、既知の事柄と未知のものとのなんらかの関係を見つけにいこうのだと私は思います。

これからも、私は映画創作の道を歩み続けますし、ひたすらこの道を進むだけです。ただし、今まで以上に、より謙虚で、より誠実に歩んでいきたいと思っています。

インタビュー

質問：スピーチの中で登場した「情懐」という言葉は、日本語ではあまりなじみがありません。張監督が思う「アジア的情懐」とは、どのようなものでしょうか。
張氏：「情懐」というのは、内心、非常に繊細な感情のことです。「初心」と言い換えることもできます。出発や初心、人と人の適切な距離感や、調和のとれた関係。私はずっとこれらを探求してきました。中国の偉大な哲学者である孔子の言葉を引用すると、「温良恭儉讓」という状態です。人と人、グループとグループ、国と国の関係が非常に良いことを意味しています。謙虚で、穏やかで、慎ましい関係を表す言葉です。

質問：生まれ育った中国だけではなく、韓国や日本といったアジアの国々で映画を撮ろうと思われたのはなぜでしょうか。また、今後どのような映画をお撮りになりたいですか。

張氏：監督になってから、映画を撮る場所をいろいろと探しています。私が生まれたのは中国の北部ですが、現代の世界を見てみると、社会は互いに融和して共生しているようです。福岡で過ごしたこの数日間、中国語や韓国語を耳にしました。皆が共に生きているのだと感じます。映画には、自分の、そして仲間、それぞれの喜怒哀楽が盛り込まれます。自分と仲間、それぞれの喜怒哀楽を共有することが必要だと思うのです。そうでなければ、互いの隔たりが大きくなってしまい、感情も遠く感じるのではないのでしょうか。こういったことを表現していきたいと考えています。



トンチャイ・ウニッチャクン

歴史学者

「より良い未来のための歴史研究の旅路 — 大学と社会をつなぐ」

■ 日 時 / 2023年9月15日(金) 18:30~20:30
■ 会 場 / アクロス福岡 4F国際会議場

第1部 基調講演

タイの歴史を新たな視点で読み解き、民主主義と社会正義を守る



歴史研究を通して、世界の人文・社会科学に大きな影響を与えたトンチャイ氏。「望ましい未来を示唆する知識は、必ず群衆の中に表れる」という信念を持ち、研究と実社会をつなぐ活動に力を注いできました。基調講演では、タイにおける民主主義と市民社会の発展を目指して歩んできた自らの旅路を語り、新たな歴史観に基づく未来への提言を行いました。

タイのバンコクで生まれ育ったトンチャイ氏は、軍事政権下の抑圧的な教育体制に疑問を持つ生徒だったそうです。1973年の学生運動を発端に、20年近く続いた軍事政権が崩壊。その後、タマサート大学に進学したトンチャイ氏は、学生運動のリーダーになります。民主主義革命によって、労働や教育など様々な場で争議が活発化する中、悲劇は起こりました。1976年、軍政の復活に反対する大学構内の集会で、50人近くもの虐殺が行われたのです。主導者として逮捕され、2年間の投獄生活を送ったトンチャイ氏。「社会を変えるためには、もっと社会を知る必要がある」と考えて学問の道に進み、大学教授として若い世代の教育に携わってきました。「犠牲になった人たちのことを忘れた日は、1日ありません」という言葉には、根底に流れる強い思いが込められていました。

トンチャイ氏は自身の歩みについて話した後、タイの中央集権的な問題点について見解を述べました。エリートや軍部が支配する政権を正当化する歴史教育のように、「イデオロギーが主導するものであってはいけません」と指摘。歴史には常に複数の道筋が存在し、多様な角度から読み解く重要性を訴え、タイの歴史を再考した著書『地図がつくったタイ』の執筆に挑んだことを明かしました。

そして、現在のタイに視点を移し、高校生を中心とした学生運動が活発化している現状と、デモに参加した学生の声を伝えました。「歴史は将来の種である」と、過去を再検討することで新たな道を拓く可能性を示したトンチャイ氏。より良い未来のために挑戦を続ける決意を改めて表明しました。

第2部 対談

真実の物語を伝えていくために

はじめに、コーディネーターの清水展氏が今年5月にタイで行われた選挙の結果に触れ、民主主義の動きが高まっている現状を伝えました。「社会運動の中心である若者たちに、トンチャイ氏の著書や発信が大きな影響を与えている」とコメントしました。続いて、タイ研究者の小泉順子氏が、著書『地図がつくったタイ』を中心にトンチャイ氏の業績を紹介。近代国家としてのタイが、地図という技術によって生まれたとする独自の概念について解説しました。

対談では、学生時代のことや研究について小泉氏が質問。トンチャイ氏は、学生運動に参加したきっかけや、大学で起きた虐殺事件について触れ、「歴史という視点を通して社会を理解し、タイの全体に関わりたい」という思いに至った経緯を語りました。そして、研究者として試行錯誤しながら新しい歴史に挑んだ過程や、また、研究の過程で地図の美しさに心打たれたこと、そして、真実の物語を伝えていくために『地図がつくったタイ』を執筆したことを語りました。また、タイの若い読者から「過去が違う方向から見えるようになった。未来の見方も変わっていくのではないかと、うれしい反応があった」と笑顔で話しました。

東南アジアにおけるタイの役割や、法制度の問題点など、会場からの質問も交えて話題は尽きず、どんな質問にも誠実に向き合うトンチャイ氏の熱意が伝わる対談となりました。



対談者 小泉 順子
(京都大学東南アジア地域研究研究所教授)



コーディネーター 清水 展
(関西大学政策創造学部客員教授)

カタリーヤ・ウム

政治学者・東南アジア研究者

「ひとりの力と大勢の中間の強さを求めて— 難民の旅から研究者の旅へ」

■ 日 時 / 2023年9月14日(木) 18:30~20:30
■ 会 場 / アクロス福岡 4F国際会議場

第1部 基調講演

一人ひとりの行動が大きな力となり、世界に正義と光をもたらす



政治学と東南アジア研究の研究者であり、若い世代の教育にも力を注いできたカタリーヤ・ウム氏。第1部では、難民としての壮絶な経験、研究者としての精力的な活動の歩み、難民問題に対する人々への期待が語られました。

冒頭では、1億人を超える人々が避難を余儀なくされている現状を示し、難民問題は世界の喫緊の課題であると指摘。環境破壊や輸入労働力への依存が及ぼす影響を例に挙げ、「難民は慢性的に生み出されている」と強調しました。

家族と共に米国に逃れ、カンボジア系米国人女性として初めて博士号を取得するまでの道りは過酷なものでした。「大量虐殺のような歴史的なトラウマは、人間の魂をも傷つける」という言葉は重く、トラウマによる難民たちの「沈黙」の背景を、実体験をもとに伝えました。

政治学との出会いと研究活動の指針について話した後、バークレー校での研究の日々を振り返りました。「知識の進歩だけではなく、自分たちのコミュニティを向上させ、日常に光と正義をもたらすことが私の責務です」と語るウム氏は、アジア人によるアジア研究がなかった状況に疑問を抱き、アジアの人々を中心に置いた研究を目指してきました。さらに教育者として、「学生には、自分たちに遺された歴史を取り戻す力をつけさせたい。そうすれば、自分のアイデンティティだけでなく、将来性をも取り戻すことに繋がる」と語りました。

終盤では、グローバルな相互依存関係が続く現代に再び目を向け、「無関心によって負った傷は深い。その傷を唯一癒やすのは思いやりなのです」と訴えました。平和の重要性を知る日本人に期待を寄せ、一人の小さな行動がいかに大きな力をもたらすのか熱く語りました。そして、「想像力を活かして、勇気をもって行動し、豊かな世界を後世に残していきましょう」と呼びかけました。最後に、米国の詩人アマンダ・ゴーマン氏の詩を引用し、講演を締めくくりました。

『光はいつもそこにある。私たちがその光を見つめ、そしてその光になる勇気さえあれば。』と。

第2部 対談

移民・難民の現状を理解することから始めよう



第2部では、対談者に田村慶子氏を迎え、現在の移民・難民問題への取り組みについて意見が交わされました。

はじめに、田村氏が日本の移民・難民の現状について、データを示しながら説明しました。難民認定数が少ない要因として、認定基準や国民の関心度を挙げました。これに対し、ウム氏は「先進国以外からの難民に対して、恐怖や抵抗もあるのではないかと」応えました。

ウム氏は米国で、難民同士が助け合う組織を一から築き上げ、大学では教育を通じた支援に力を注いできました。「さまざまな学部で学んだ学生たちは、社会で活躍の場を広げ、その素晴らしい経験を共有してくれる」と笑顔で語りました。

「移民・難民問題は数世代にわたり、世代間のギャップを埋め、「沈黙」を克服するのは容易ではない」とするウム氏は、辛い過去を振り返る痛み、その痛みを次の世代には伝えたくないという当事者らの思いに、寄り添ってきました。

日本人として移民・難民問題に対してできることはあるかという会場からの質問に、ウム氏は「情報を共有し、現状を理解することが重要だ」と答えました。最後にウム氏から「一人ひとりの声がかたまのように響き合い、世界に通じる大きな声になる」と、温かいメッセージが送られました。



対談者 田村 慶子
(北九州市立大学名誉教授)



コーディネーター 竹中 千春
(立教大学法学部元教授)

芸術・文化賞 市民フォーラム

張律 (チャン・リュル) 映画監督

「チャン・リュル from/to FUKUOKA— 作家とまちの縁 (えにし)」

■ 日 時 / 2023年9月13日(水) 18:30~21:30
■ 会 場 / 中洲大洋映画劇場

第1部 映画上映 映画『福岡』



国籍・国境を越えた比類なき「東アジア映画」を創り続けている張氏。第1部では、張氏が監督を務め、福岡ロケで撮影された『福岡』(2019年/韓国・日本・中国/86分)を上映。会場となった中洲大洋映画劇場の周辺や、見慣れた福岡のまちがスクリーンに数多く登場し、観客は親しみを感じながら映画を鑑賞しました。

第2部 対談 生活の質感がある空間で、 まちと人を描き出す

映画鑑賞をした観客に向けて、張氏から感謝の言葉が述べられた後、コーディネーターの石坂氏より張氏と福岡との縁が紹介されました。「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」の参加をきっかけに2007年からほぼ毎年福岡を訪れるようになった張氏。映画祭では、これまでに7本の作品が上映されました。また、福岡との交流が深まる中でアイデアが膨らみ、福岡三部作が誕生。制作過程で多くの市民や県民が関わり、映画を通して交流を深めてきました。

対談では、映画『福岡』の特徴的な描写をもとに石坂氏が質問を投げかけ、張氏の人生観や世界観に迫っていきました。登場人物について、「酔っ払い男とシャッキリ女」という男女の違いが際立っている点を伝えると、頷いていた張氏。「男性たちは強い責任感を持って働いており、お酒を飲むと解放されて変わる様子がおもしろい。自分もその中の一人だ。女性たちは勇敢に前に進んでいく人が多い。私の家族でも、母や姉のほうがしっかりしている」と、自身の経験を交えて応えました。

東アジア映画というジャンルを確立し、国境を越えた世界観を表現している張氏。異なる言語が自然に通じ合う演出について、「言葉はコミュニケーションの手段。力を持つ国の言語だけが使われるのではなく、それぞれ自分の美しい言語を話し、障害なく通じ合えることが私の理想。そのビジョンを映画の中で実現した」と、思いを語りました。



また、石坂氏が「監督の映画では、存在と不在、わかりそうでわからない、そのちょうど間ぐらいを描いている。これについて、どのようにお考えですか」と質問。張氏は「目に見えるものと見えないものが二

分されるのではなく、その間にたくさんの接点がある」と応え、亡くなった家族や思い出の場所など、記憶の中に多くのものが存在している考えを表しました。現実と幻想(ファンタジー)を織り交ぜた演出に関しても、頭の中では誰もが様々なことを思い浮かべている例を出して説明し、「現実が3分の1、幻想は3分の2というのが、生活の質感だと思う」と、独自の視点を表現しました。

そして、作品の随所に登場する尹東柱(ユン・ドンジュ)の詩が、現実と幻想の橋渡しとなっていることに触れ、詩の独特なリズム感によって幻想に導く手法を明かしました。尹東柱は張氏と同郷の詩人。母国語の朝鮮語を大事にした生き方に対して、張氏は尊敬の念を示しました。参加者からの質問で映画にBGMを使っていない理由を聞かれると、できる限り音楽によって情緒的に誘導する方法は用いない考えを示しました。

ロケ地の選定にあたっては、有名な観光地ではなく生活空間を重視。「一般の人たちの感情や習慣が感じられる空間を選んでいる。生活の質感がある場所は、観客の皆さんが見たときに化学反応を起こしやすいと思っている」と話しました。

最後に、再び福岡で映画を撮影する意思を示した張氏に、会場から大きな拍手が送られました。福岡との縁がこれからも続くことを願い、劇場でのフォーラムは幕を閉じました。



コーディネーター 石坂 健治
(日本映画大学教授・映画学部長)

第33回 芸術・文化賞 連携企画

“福岡三部作”上映

張律氏の福岡アジア文化賞芸術・文化賞の受賞を記念し、市民フォーラムでの映画『福岡』上映を皮切りに、『群山：鷺鳥を詠う』『柳川』を相次いで上映しました。張律氏が両会場を訪れ、上映前に登壇挨拶を行いました。

○『群山：鷺鳥を詠う』上映

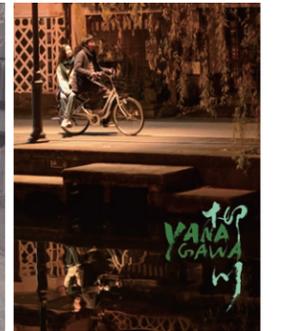
日時 / 2023年9月14日(木) 18:30~20:30
会場 / 福岡アジア美術館 あじびホール
主催 / 福岡アジアフィルムフェスティバル



『群山：鷺鳥を詠う』



『福岡』



『柳川』

○『柳川』上映

日時 / 2023年9月16日(土) 14:00~15:50
会場 / 福岡市総合図書館映像ホール・シネラ
主催 / 福岡市総合図書館



福岡アジアフィルムフェスティバルでの登壇挨拶



シネラでのパネル展示



シネラでの登壇挨拶

ワークショップ開催

○ワークショップ『映画監督の学校』

日時 / 2023年9月15日(金) 10:00~17:00
会場 / 福岡市赤煉瓦文化館、映画『福岡』ロケ地(天神・中洲地区)
主催 / クリエイティブ・ラボ・フクオカ

映画監督や映画プロデューサーを志望する若手クリエイター7名に向けて、1日限りの特別授業を行いました。張律氏による受講者作品・企画へのフィードバックの後、映画『福岡』のロケ地となった天神・中洲地区を巡り、その構図で撮るに至った経緯や、ロケハンの際に重視していたポイントなど映画制作の手法をレクチャーしました。



大賞

トンチャイ・ウニツチャクン

歴史学者

■日時/2023年9月13日(水) 13:35~15:15 ■会場/香住丘高等学校



英語学科の1、2年生に向けて、「タイにおける過去と現在の若者の社会運動」をテーマに講演をしたトンチャイ氏。民主化を求めて1973年から1976年にタイで起こった学生運動を中心に、軍事独裁政権に抑圧された激動の歴史が語られました。多数の若者が集まるデモの様子や、当時17歳だったトンチャイ氏の写真などをスライドで映し、運動に参加した自らの体験を交えて説明。その後も、国政が変化を繰り返してきた経緯や、10年ほど前から学校で言論や頭髪などの規制が厳しくなってきたことにも言及しました。そして、2020年から活発化した学生運動に焦点を当て、デモの参加者の多くが高校生であり、特に女子学生が増えている状況を伝えました。

後半では、トンチャイ氏が「なぜ最近になって運動が起こり、参加者が若年化したのか考えてほしい」と問いかけ、ディスカッションが行われました。「ソーシャルメディアの発展で、若者が情報を得て意見を交わせるようになった」という生徒の発言に対して、歴史学者の中でも同様の見解があると評価し、さらに様々な角度から「Why?」を追求し様々な考えが発表されました。

最後に生徒代表からお礼と感想が伝えられ、花束贈呈では温かい拍手が沸き起こりました。親しみやすい笑顔と熱意あふれる語り口で、人を惹きつける魅力を持つトンチャイ氏。国際的な政治問題に対する関心を高め、生徒たちの視野を広げる有意義な授業となりました。

参加者の声

- ・政治的な活動をする高校生が世界にいたことに驚いた。もっと広い視野で世界を見渡せる人間になりたいと思った。
- ・タイの学生は政治の動向に積極的に反応を示していて、私たちの政治に対する積極性はもう少し高くなる必要があると感じた。

- ・いろいろな質問を考えているうちに、次々に新たな疑問が生まれ、とても有意義な時間だった。
- ・世界中の社会的運動や文化、政治など、多方面から物事を学ぶべきだと思った。



学術研究賞

カタリヤ・ウム

政治学者・東南アジア研究者

■日時/2023年9月15日(金) 13:30~15:00 ■会場/上智福岡中学高等学校



第1部では、「思いやりこそ新しい格好良さ—今いる場所からできること」と題する講演が行われました。ホールに集まった高校2年生とスタディツアー参加生徒に拍手で迎えられ、登壇したウム氏。近年、特にアジアで移民や難民が増えている現状と、背景にある問題点について解説しました。1975年に内戦下のカンボジアから難民として米国に移住した経験や、難民の多くが偏見に苦しんでいることをスライドを通して伝え、「私たちが望んでいるのは、普通の人間として平和に暮らすことです」と発言。また、カンボジアで起きた大虐殺に心を痛め、祖国の歴史を語り継ぐ決意に至った思いも語りました。講演の結びには、「皆さんが道を照らす光になってほしい。ホテルのように小さくても、共に世界を明るくすることはできるのです」と、希望を込めたメッセージを送りました。

第2部では会議室に場所を移し、今年8月に学校主催で実施したカンボジア・スタディツアーの参加生徒14名が、小学校での教育ボランティアやツールズレン刑務所の見学など、現地での活動を英語で発表しました。ウム氏は「歴史に興味を持って学び、多くの人と関わり、様々な体験にチャレンジしたことが素晴らしい」と講評しました。質疑応答では生徒から次々と手が挙がり、政治学を学んだ理由や、人生で大切にすべきことなどを尋ねました。丁寧に紡がれる言葉に、熱心に聞き入っていた生徒たち。対話を通してウム氏の強い使命感や優しい人柄にも触れ、心に響く交流の時間となりました。

参加者の声

- ・世界の難民問題へ関心を持つきっかけとなったとともに、その深刻さを改めて認識した。
- ・難民として移住した当初、「『普通』に憧れていた」という言葉が印象深かった。自身が恵まれた環境にいるからこそ、力を伸ばし、誰かの助けになりたいと思う。
- ・「人に対し善悪どちらの行動を取るかは自分次第」という言葉が響いた。せつかくであれば人に親切にしていきたいと思った。
- ・笑顔で接する、声をかけるといった私たちがすぐにはできない小さな行動であっても、実際に苦しんでいる方々にとって、救いとなり得るという話から、ぜひ積極的にやってみようと思った。

- ・映画『柳川』の中で、地名から着想を得て、登場人物に「柳川(リウチュアン)」と名付けたのは面白い発想だと思った。
- ・チャン・リュル監督の詩的な感性に触れることができ、貴重な時間だった。
- ・小手先のテクニックで「映える」映像を撮るのではなく、自ら映像の美を見つけないといけない姿勢に感銘を受けた。
- ・映画を制作する際、どのように自分の感情を表現したらいいのか日々模索しているが、今日の講義で、創作の手法についてヒントをもらうことができた。



芸術・文化賞

張律 (チャン・リュル)

映画監督

■日時/2023年9月14日(木) 13:30~15:00 ■会場/九州産業大学



映像関係を専攻する学生に向けて、「映画制作のエッセンス」をテーマに開催された講演会。同大学の教授・黒岩俊哉氏の質問に、張氏が応える対談形式で進められました。はじめに黒岩氏が、「監督の映画には独自のスタイルがあり、時間や場所が幻想的に交錯する芸術性の高い作品」と紹介し、張氏の世界観をひもといていきました。

作品づくりで重視していることについて、「ありふれた日常生活の中で、愛や感動が生まれることがある。創作者として、記憶に刻まれる出来事をしっかり捉え、心が動いた瞬間をつなげていきたい」と話した張氏。さらに、「他界した人も記憶の中に存在している」と言い、生と死は一体となっている考えや、「記憶」によって時間や場所が繋がっている感覚について

持論を展開しました。また、物事を観察する際、様々な角度や距離からカメラで撮影するように、自分の中に異なる「視線」を持ち、多角的に捉える大切さを語りました。「映像の美とは?」という問いには、「作られるものではなく、発見するもの。目と感情を使ってたどり着く」という見方を示しました。

最後に参加者から、創作の表現方法や作品内容に関する質問が寄せられ、張氏から説明がありました。総括として、黒岩氏が「境界を超え続ける映画」と張氏の作品を表現。張氏が「東アジア映画」と呼ばれる新ジャンルを確立したことに触れ、既存の枠組みを超越した創造力と芸術性を称えました。

参加者の声

- ・映画『柳川』の中で、地名から着想を得て、登場人物に「柳川(リウチュアン)」と名付けたのは面白い発想だと思った。
- ・チャン・リュル監督の詩的な感性に触れることができ、貴重な時間だった。
- ・小手先のテクニックで「映える」映像を撮るのではなく、自ら映像の美を見つけないといけない姿勢に感銘を受けた。
- ・映画を制作する際、どのように自分の感情を表現したらいいのか日々模索しているが、今日の講義で、創作の手法についてヒントをもらうことができた。

- ・映画『柳川』の中で、地名から着想を得て、登場人物に「柳川(リウチュアン)」と名付けたのは面白い発想だと思った。
- ・チャン・リュル監督の詩的な感性に触れることができ、貴重な時間だった。
- ・小手先のテクニックで「映える」映像を撮るのではなく、自ら映像の美を見つけないといけない姿勢に感銘を受けた。
- ・映画を制作する際、どのように自分の感情を表現したらいいのか日々模索しているが、今日の講義で、創作の手法についてヒントをもらうことができた。



2021年(第31回)大賞受賞者 **パラグミ・サイナート氏**(ジャーナリスト)

講演会

Do we need a new journalism in the era of corporate media ?
(企業メディアの時代に新しいジャーナリズムは必要か)

- 日 時 / 2023年10月21日(土)13:00~15:00
- 会 場 / JR博多シティ10F 大会議室
- 主 催 / 九州大学アジア・オセアニア研究教育機構、福岡市、(公財)福岡よかトピア国際交流財団



民衆のためのジャーナリズムを追求する

サイナート氏は、グローバリゼーションの中で急激に変動するインドで、「農民の物語」を伝え続けている気骨のジャーナリスト。2014年にデジタル・ジャーナリズムのプラットフォーム「People's Archive of Rural India(農村インド民衆文書館)」を立ち上げ、農村社会の現状を収集し、多言語で発信する独自の取り組みを続けています。

この日の講演は「正義」「不平等」「気候変動」の観点からジャーナリズムについて語られました。

冒頭、サイナート氏は、「インターネットでは誰もが自由に声を上げられるといわれるが、実際はどうだろうか」と投げかけ、「大企業は、インターネットを支配し、利益のために使用するため、農民の困難を伝えることはない。メディアの正義は機能していないのではないか」と問題提起しました。例えば、インドでは、1990年代から深刻な農村危機が起り、40万人以上が自殺しました。サイナート氏はこの問題と向き合い、900世帯以上の農家取材。しかし、インドの大手新聞社のひとつがこの農村の苦悩を取り上げるまで7年の年月がかかり、その間もサイナート氏は記事を書き続けていたそうです。

そして、「コロナは、社会の不平等を白日にさらした」とパンデミックを振り返りました。コロナ禍においてインドでは、都市部で働

いている農村出身者が帰郷を希望しても政府は彼らを留めようとしたこと、医療・製薬業界が莫大な財産を築き、人口の1%でしかない億万長者がGDPの約半分を占めるようになったこと、これまで学校から女子生徒に無償で配布されていた清潔な生理用品がロックダウンのために入手できなくなったこと、オンライン教育が進む一方で、それを受けられない子どももいること、住む州や地区によってインターネット使用格差が生じていること等を語りました。

さらに、気候変動について、「私たちは状況の深刻さを学ばなければならない。このままでは漏水している水道の蛇口を閉めないままではいけない」と訴え、海の中に沈んだ村、かつて穀倉地帯だった大地の砂漠化など、氏が撮影した画像を映しながら解説しました。水や食物を求めて野生動物が人里に出没している現象にも触れ、新たな感染症を防ぐ観点からも自然環境保護の重要性を伝えました。

「今、地球で何が起っているのか。農業や漁業をしている人と話せば見えてくる。普通の人々の姿を語る民衆のメディアが必要だ」と語るサイナート氏。「企業よりコミュニティ、利益より人に焦点を当てるのが、本来ジャーナリズムが追求すべきこと。私たちが行動し、変えていかなければならない」と、力強く発信しました。

学校訪問

- 日 時 / 2023年10月20日(金)17:10~18:50
- 会 場 / 西南学院大学

「声なき人びとは? 彼らにとっての自由とは?」をテーマに、学生たちとの討論会が開かれました。はじめに、サイナート氏の活動紹介として、農村危機による困窮で自殺する農民について取材したドキュメント映像を放映。その後、登壇した学生6名(外国語学部、経済学部、留学生別科)がそれぞれ質問し、活発なディスカッションが行われました。

「自殺をした農民の遺族と会い、自分もつらい思いをしてまで農村の取材を続けるのはなぜか」という質問に対し、農村の魅力を語ったサイナート氏。「農村はインドの多様性の象徴であり、ジャーナリストにとって素晴らしいところだ。8億3300万人が780もの異なる言語を話し、希少な言語も残っている。取材はつらいこともあるが、農村の美しさや偉大さ、人間の尊厳からエネルギーをもらっている」と答えました。



また、国の政策が農民を苦しめ、利益優先のメディアが農村危機を報道しない状況について説明。こうした中でも、農民は政府が制定した農業法に抗議を続け、2021年に法律を撤回させたことを伝え、「インドの農民の強さは素晴らしい。自分もその活力に惹かれている」と称えました。

ディスカッションの最後には、「若者は正義について学び、行動すべき。どんなテーマであっても、どこに正義があるのか見失わないでほしい。私は人類に希望を持っている」と、熱意あふれるメッセージを贈りました。

密度の濃い時間を共有し、真摯に語り合った登壇者全員に向けて、会場の学生からは惜しめない拍手が送られました。

福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor 1990-2022

第1回

創設特別賞

巴金
BA Jin
(中国 / 作家)



『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞

黒澤明
KUROSAWA Akira
(日本 / 映画監督)



『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
(英国 / 中国科学史研究者)



中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞

ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
(タイ / 作家・政治家)



大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をもした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞

矢野 暢
YANO Toru
(日本 / 社会学者)



日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

1990

第2回

大賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
(インド / 音楽家・シタール奏者)



豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
(インドネシア / 歴史学者・社会学者)



東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

学術研究賞

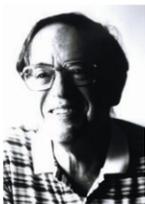
中根 千枝
NAKANE Chie
(日本 / 社会人類学者)



アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
(米国 / 日本文学・文化研究者)



大著『日本文学史』をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

1991

第3回

大賞

金元龍
KIM Won-yong
(韓国 / 考古学者)



東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
(米国 / 文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内 實
TAKEUCHI Minoru
(日本 / 中国研究者)



社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
(フィリピン / 建築家)



東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

1992

大賞

費孝通
FEI Xiaotong
(中国/社会学・人類学者)



中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
(マレーシア/経済学者)



マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
(日本/民族地理学者)



ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
(モンゴル/声楽家)



モンゴルの伝統的な民謡オルティンドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

大賞

李基文
LEE Ki-Moon
(韓国/言語学者)



韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
(米国/人類学者)



タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

上田 正昭
UEDA Masaaki
(日本/歴史学者)



日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

R. M. スダレソ
R. M. Soedarsono
(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)



芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

大賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
(タイ/考古学・美術史学者)



タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的立場づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王 廣武
WANG Gungwu
(オーストラリア/歴史学者)



華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井 米雄
ISHII Yoneo
(日本/東南アジア研究者)



タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
(インド/舞踊家)



インド古典舞踊パーラタナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

大賞

侯孝賢
HOU Hsiao-hsien
(台湾/映画監督)



厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て『悲情城市』などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞

大林 太良
OBAYASHI Taryo
(日本/民族学者)



日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究者の泰斗。

学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
(タイ/歴史学者)



斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu
(シンガポール/ビジュアルアーティスト)



独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

大賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
(インドネシア/文化人類学者)



インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓基彦
HAHN Ki-un
(韓国/教育学者)



独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島 昇
KARASHIMA Noboru
(日本/歴史学者)



刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
(米国/ビデオ・アーティスト)



テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

大賞

プラムディヤ・アナタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
(インドネシア/作家)



『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問い続けた作家。

学術研究賞

タン・トゥン
Than Tun
(ミャンマー/歴史学者)



厳密で実証的な歴史学的方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
(アイルランド/政治学者)



世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を開いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
(マレーシア/影絵人形遣い)



マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

大賞

王仲殊
WANG Zhongshu
(中国/考古学者)



古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
(ベトナム/歴史学者)



イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衛藤 藩吉
ETO Shinkichi
(日本/国際関係研究者)



中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
(パキスタン/カウワーリー歌手)



イスラーム宗教歌謡カウワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

大賞

ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
(バングラデシュ/経済学者)



『グラミン銀行』を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞

速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
(日本/経済学者)



市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ『速水開発経済学』とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
(タイ/画家)



タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞

マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
(フィリピン/映画監督)



民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

大賞

チェン・ボン
CHHENG Phon
(カンボジア/劇作家・芸術家)



内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
(インド/歴史学者)



独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
(日本/考古学者)



フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

林 権澤
IM Kwon-taek
(韓国/映画監督)



韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

大賞

張 芸謀
ZHANG Yimou
(中国/映画監督)



現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞

キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
(スリランカ/歴史学者)



スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞

アンソニー・リード
Anthony REID
(オーストラリア/歴史学者)



『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を開いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞

ラット
Lat
(マレーシア/マンガ家)



マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第14回 2003

大賞
外間 守善
 HOKAMA Shuzen
 (日本/沖縄学者)



「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞
レイナルド・C・イレート
 Reynaldo C. ILETO
 (フィリピン/歴史学者)



東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞
徐 冰
 XU Bing
 (中国/アーティスト)



独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞
ディック・リー
 Dick LEE
 (シンガポール/シンガーソングライター)



シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第19回 2008

大賞
アン・ホイ
 Ann HUI
 (香港/映画監督)



幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のパイオニア。

学術研究賞
サヴィトリ・グナセーカラ
 Savitri GOONESEKERE
 (スリランカ/法学者)



南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞
シャムスル・アムリ・バハルディーン
 Shamsul Amri Baharuddin
 (マレーシア/社会人類学者)



民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞
フォリダ・パルビーン
 Farida Parveen
 (バングラデシュ/音楽家)



バングラデシュの伝統的な宗教歌謡パウル・ソングの芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第15回 2004

大賞
アムジャッド・アリ・カーン
 Amjad Ali KHAN
 (インド/サロッド奏者)



インド古典弦楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞
厲以寧
 LI Yining
 (中国/経済学者)



中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞
ラーム・ダヤル・ラケーシュ
 Ram Dayal RAKESH
 (ネパール/民俗文化研究者)



ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞
ローランド・シルワ
 Roland SILVA
 (スリランカ/文化遺産保存建築家)



イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第20回 2009

大賞
オギュスタン・ベルク
 Augustin BERQUE
 (フランス/文化地理学者)



欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞
パルタ・チャタジー
 Partha CHATTERJEE
 (インド/政治学・歴史学者)



正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学者・歴史学者。

芸術・文化賞
三木 稔
 MIKI Minoru
 (日本/作曲家)



邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞
蔡國強
 CAI Guoqiang
 (中国/現代美術家)



北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第16回 2005

大賞
任東権
 IM Dong-kwon
 (韓国/民俗学者)



韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞
トー・カウ
 Thaw Kaung
 (ミャンマー/図書館学者)



貴重な貝葉写本の保存と活用にも多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

芸術・文化賞
ドアンダワン・ブンニャウォン
 Douangdeuane BOUNYAVONG
 (ラオス/織物研究者)



ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

芸術・文化賞
タシ・ノルブ
 Tashi Norbu
 (ブータン/伝統音楽家)



ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニア。

第21回 2010

大賞
黄秉冀
 HWANG Byung-ki
 (韓国/音楽家)



韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞
ジェームズ・C・スコット
 James C. SCOTT
 (米国/政治学者・人類学者)



東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞
毛里 和子
 MORI Kazuko
 (日本/現代中国研究者)



アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞
オン・ケンセン
 ONG Keng Sen
 (シンガポール/舞台芸術家)



現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第17回 2006

大賞
莫言
 MO Yan
 (中国/作家)



現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた。世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。

学術研究賞
シャグダリン・ピラ
 Shagdaryn BIRA
 (モンゴル/歴史学者)



世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞
濱下 武志
 HAMASHITA Takeshi
 (日本/歴史学者)



アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞
アクシム・ムフティ
 Uxi MUFTI
 (パキスタン/民俗文化保存専門家)



「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基盤を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第22回 2011

大賞
アン・チュリアン
 ANG Choulean
 (カンボジア/民族学者・クメール研究者)



「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつつたカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞
趙 東一
 CHO Dong-il
 (韓国/文学者)



主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞
ニールズ・グッチョウ
 Niels GUTSCHOW
 (ドイツ/建築史家・修復建築家)



南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築史家・修復建築家。

第18回 2007

大賞
アシシュ・ナンディ
 Ashis NANDY
 (インド/社会・文明評論家)



臨床心理学と社会学を統合させた独自の的方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞
シーサク・ワンリポードム
 Srisakra VALLIBHOTAMA
 (タイ/人類学・考古学者)



関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞
朱 銘
 JU Ming
 (台湾/彫刻家)



深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求め創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞
金 徳 洙
 KIM Duk-soo
 (韓国/伝統芸能家)



「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第23回 2012

大賞
ヴァンダナ・シヴァ
 Vandana SHIVA
 (インド/環境哲学者)



開発やグローバル化の矛を鋭く指摘し、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞
チャーヌウィット・カセートシリ
 Charnvit KASETSIRI
 (タイ/歴史学者)



アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞
キドラット・タヒミック
 Kidlat Tahimik
 (フィリピン/映画作家・アーティスト・文化観察者)



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞
クス・ムルティア・パク・ブウォノ
 G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
 (インドネシア/宮廷舞踊家)



幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第24回 2013

大賞
中村 哲
 NAKAMURA Tetsu
 (日本/医師)



パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
 Tessa MORRIS-SUZUKI
 (オーストラリア/アジア地域研究者)



民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
 Nalini MALANI
 (インド/アーティスト)



映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞
アピチャップン・ウィーラセタクン
 Apichatpong WEERASETHAKUL
 (タイ/映画作家・アーティスト)



民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像手法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

第25回 2014

大賞
エズラ・F・ヴォーゲル
 Ezra F. VOGEL
 (米国/社会学者)



戦後アジアの政治経済社会の変動や、アジアの新工業地域(NIEs)の先駆的な研究に業績をもち、国際関係に関する冷静で重みのある提言を行う東アジア研究の権威。

学術研究賞
アジュマルディ・アズラ
 Azyumardi AZRA
 (インドネシア/歴史学者)



イスラームの宗教・文化の深い理解に基づき、多面的で調和ある市民社会の形成に尽力し、異文化間の相互理解に貢献するパブリック・インテレクチャル。

芸術・文化賞
ダニー・ユン
 Danny YUNG
 (香港/文化クリエイター)



多数の斬新な舞台作品を発表する一方、文化政策や芸術教育にも取り組み、アジアと世界、伝統と現代を繋ぐ多彩な活動でアジアの芸術文化を牽引する文化クリエイター。

第26回 2015

大賞
タン・ミン・ウー
 Thant Myint-U
 (ミャンマー/歴史学者)



グローバルな視点からミャンマーの歩みを綴る傑出した歴史家であるとともに、歴史的建造物の保存や持続可能な都市計画に取り組み、自国の平和創造をめざす知的指導者。

学術研究賞
ラーマチャンドラ・グハ
 Ramachandra GUHA
 (インド/歴史学者・社会学者)



民衆の側に立った「環境史」の地平を切り開き、また、多様性を抱える大国インドの複雑な歴史を丁寧に辿り民主主義の実像を描いた著書でも知られる、インドを代表する歴史家。

芸術・文化賞
ミン・ハン
 Minh Hanh
 (ベトナム/ファッションデザイナー)



ベトナム固有の少数民族の刺繍や織物を融合させた現代的なデザインを創造し、若手育成や市場開拓に取り組みながら、ファッション文化の発展に貢献するデザイナー。

第27回 2016

大賞
A.R.ラフマン
 A. R. RAHMAN
 (インド/作曲家・作詞家・歌手)



民族性豊かな南アジアの伝統音楽と西洋のクラシック音楽、現代の大衆音楽を大胆に融合させた個性的な楽曲で、映画音楽の新境地を開拓する世界的に有名なインドの国民的アーティスト。

学術研究賞
アンベス・R・オカンボ
 Ambeth R. OCAMPO
 (フィリピン/歴史学者)



著書やメディアを通じた発言等を通じ、フィリピンの歴史をわかりやすく伝え、市民の国際感覚の育成に寄与するなど、フィリピンの学術・文化・社会の発展に大きく貢献している歴史学者。

芸術・文化賞
ヤスミン・ラリ
 Yasmeen LARI
 (パキスタン/建築家・建築史家・人道支援活動家)



数多くの歴史的建造物の保存修復活動や、地震や水害等の災害に対して低コストで環境にやさしいシェルターの提供を行うなど人道支援活動にも尽力した、パキスタン初の女性建築家。

第28回 2017

大賞
パースック・ボンパイットおよびクリス・ベーカー
 Pasuk PHONGPAICHT & Chris BAKER
 (タイ/経済学者) & (英国/歴史学者)



タイ社会が直面する問題を政治と経済、社会と文化など多面的に分析した共同研究は傑出しており、多大な社会貢献をしてきたタイの代表的知識人。

学術研究賞
王名
 WANG Ming
 (中国/行政学者、NGO・市民社会研究者)



中国で初めてNGO研究センターを立ち上げ、中国のNGO研究の水準を飛躍的に高めた、NGO研究、環境ガバナンスの第一人者。

芸術・文化賞
コン・ナイ
 KONG Nay
 (カンボジア/吟遊詩人、チャバイ・マスター)



内戦とポル・ポト時代の弾圧を奇跡的に生き延び、現在も演奏・作曲・後継者育成等の活動を精力的に続けることで、伝統的語り物音楽・チャバイの弾き語り現代に伝える、カンボジアの伝説的吟遊詩人。

第29回 2018

大賞
賈樟柯
 JIA Zhangke
 (中国/映画監督)



21世紀の中国を代表する映画監督。急激に経済発展する社会的歪みの中で、苦悶しながらもたたかき生きる若い人々を等身大に描いた作品は、世界的に高く評価されている。

学術研究賞
末廣 昭
 SUEHIRO Akira
 (日本/経済学者、地域研究者(タイ))



タイ経済研究を基盤として、アジア全体の工業化や経済実態を解明し、日本のアジア研究の発展に主導的な役割を果たすなど、日本におけるアジア経済研究の第一人者。

芸術・文化賞
ティージャン・バーイー
 Teejan Bai
 (インド/バンダワーニー奏者)



古代インドの叙事詩「マハーバーラタ」に基づく歌謡のバンダワーニーの第一人者。先住民であり女性であることで二重にインド社会から差別される中で歌い続け、人々に勇気を与えている。

第30回 2019

大賞
ランドルフ・ダビッド
 Randolph DAVID
 (フィリピン/社会学者)



社会学者としての知見を大学、テレビ、新聞等を通じて広く市民と共有。フィリピンにおける社会的正義のために活動し、アジアの学術・文化の交流推進と相互理解の深化にも尽力した「行動する知識人」。

学術研究賞
レオナルド・ブリュッセイ
 Leonard BLUSSE
 (オランダ/歴史学者(東南アジア史専門家))



広汎な時空間を対象とする近世東アジア/東南アジア海域史を開拓し、学際的なアプローチに基づく歴史学を確立した歴史学者。その学問は、理想的な形のグローバル・ヒストリーとして評価されている。

芸術・文化賞
佐藤 信
 SATO Makoto
 (日本/劇作家、演出家)



現代の感覚と伝統的美意識を融合させた優れた舞台を数多く制作し、国内外で高く評価されている劇作家、演出家。公共劇場の芸術監督としての活動やアジアの演劇人育成にも熱心に取り組んでいる。

第31回 2021

大賞
パラグミ・サイナート
 PALAGUMMI Sainath
 (インド/ジャーナリスト)



グローバル化に揺れるインドで、貧しい農村を訪ね、農民の声を聴き、「農民の物語」を伝える気骨のジャーナリスト。激動のアジアで、新たな「知」と市民的連帯を追求する。

学術研究賞
岸本 美緒
 KISHIMOTO Mio
 (日本/歴史学者)



中国明清期の社会経済史を専門とする歴史学者。日本における東洋史学の正統な継承者として、中国社会への内在的な視線とグローバルな視野で、常に斬新かつ問題提起的な研究を行う。

芸術・文化賞
プラープダー・ユン
 Prabda YOON
 (タイ/作家、映画作家、アーティスト)



タイを代表する作家の一人であり、評論家、脚本家等としても活躍するマルチクリエイター。タイ文学・思想の発展に寄与し、タイにおける日本理解の更新にも貢献する。

第32回 2022

大賞
林 英哲
 HAYASHI Eitetsu
 (日本/太鼓奏者)



創作太鼓音楽の最先端を走り続けてきた、世界的に活躍する太鼓奏者。伝統に根ざした太鼓文化を基盤としつつ、身体所作の力強さと美しさを伴う新しい舞台芸術として、太鼓の表現を飛躍的に発展させた。

学術研究賞
タイモン・スクリーチ
 Timon SCREECH
 (英国/美術史家)



江戸を主たるフィールドとし、広くビジュアル情報として残された歴史を解明し続ける美術史家。多面的かつグローバルな視点と斬新な方法論によって江戸研究の新たな地平を切り開いている。

芸術・文化賞
シャジア・シカンダー
 Shahzia SIKANDER
 (米国/アーティスト)



南アジアを代表するアーティスト。伝統的な細密画の世界に、最新のデジタル技術を駆使して伝統絵画を今を生きる魅力的な造形として蘇らせ、新たな芸術表現を開き続けている。

